

冬枯れ草地への具体的対策

はじめに

本稿では、“早春の草地管理について”という話題で、牧草の越冬に関わる要因、対策などを(342号：平成24年3月発行)紹介させて頂きました。その後、冬枯れ草地への対応についての問い合わせを多く頂いていたので、今回は、具体的な対応方法について紹介させて頂きます。

1. 播き直しのポイント

はじめに、対応方法として考えなければならない事は、草地全体に播き直しが必要な場合と部分的な播き直しで済む場合と、その対応は両者で大きく変わるということです。

草地全体の播き直しが必要な場合は、当年の飼料確保が課題になりますので、速やかな判断が求められます。当年の飼料確保のため、ムギ類(エンバク)や地域によってはデントコーンの播種も検討される事がありますが、草地にもどす場合は、機械が入れる春の早い時期に播種する必要があります。牧草の春播きは、雑草との競合や早魃の影響が心配されますので、チモシーの中でも初期生育の優れた早生品種(ホライズン)を選択される事をお奨めします。

一方、部分的な播き直しで済む場合は、追播作業となります。既存牧草を生かしつつ追播牧草を定着させていかなければならないので、裸地の割合も考慮しながら播種時期も含め対策を決めていきます。

裸地率が6割以上ある場合は、草地全体の播き直しと同様に、機械が入れる春の早い時期に播種する必要があります。次に裸地率が4~5割程度の場合は、当年の収穫量が減収してしましますが、2番草収穫後(8月下旬)の既存牧草が再生してくる前に追播すると、追播牧草の定着率も高く改善効果が認められます。一方、裸地率が3割程度の場合では、チモシーの追播がたいへん難しくなりますので、追播草種の検討をお奨めします。その場合、発芽初期生育が

早く、糖度の高いフェストロリウム(バーフェスト)、ペレニアルライグラス(フレンド)や、またオーチャードグラス(バックス)などを混播して利用すると良いでしょう。混播草種や播種割合等についてのご相談は、お近くの営業所へお問い合わせください。

2. 播き直しの方法①

完全更新後や火山灰土壌などで表層が柔らかい場合は、ブリリオン(写真1)やブロカスで播種し、その後鎮圧します。この時に牧草種子がしっかりと覆土出来ているかがポイントになります。覆土されていないと、その後の発芽不良や生育不良の原因となり、早魃の影響も受けやすくなります。鎮圧だけで覆土が出来ない場合は、播種前に手持ちのハローを利用して、土を露出させてから播種・鎮圧作業を行い、覆土が確実にできれば、発芽や初期生育も良く、草地も綺麗に仕上がります。



写真1 播種機：ブリリオン

この時の播き直しで、パワーハローを利用する場合があります。更新方法が完全更新もしくは表層攪拌等で、表土が柔らかい状態のまま利用する場合は、概ね問題ないのですが、作溝型などの専用播種機を利用した更新後の播き直しでは、表土が固いままで、パワーハローでは砕土できる深さが浅く、覆土が十分にできず失敗してしまう事例が多いのが現状です。こ

のような場合は、ロータリーハローやデスクハローを利用し、土を露出させ表土を柔らかくし覆土が確実にできる状態にすることが必要です。

3. 播き直しの方法②

次に、作溝型の専用播種機を利用して播き直しを行う場合のポイントを紹介します。

この種の播種機を利用する場合、播種機の種類を二つに分けて考える必要があります。ひとつは、オーバーシーダー（写真2）やハーバーマット（写真3）です。このタイプは、ナイフやデスクで溝を切り播種します。播種部は独立懸架型のため播種機にウェイトを掛けて草地の凸凹に播種部を追随させていくタイプです。そのため、完全更新後のように表層が柔らかい状態で、これらの播種機を利用すると、表土を抱いてしまうので、利用にあたっては注意が必要です。



写真2 オーバーシーダー
(ブレド)



写真3 ハーバーマット

もう一つは、グレイトプレイン（写真4）やシードマスター（写真5）、シードマチック（写真6）などです。これらのタイプは、オープナーやデスクで溝を切り播種するタイプで、播種機にウェイトを掛ける必要はありません。土を



写真4 グレイトプレイン



写真5 シードマスター



写真6 シードマチック

抱いてしまう構造ではないので、表層が柔らかい状態でも利用が可能です。

以上のことから、播き直しに専用播種機を利用する場合は、播種機の特徴と現状の表層の土の状態を確認してから判断することをお奨めいたします。

4. 当年の飼料確保のために

草地全体の播き直しが必要な場合は、当年の飼料確保が課題になります。そのため当年の飼料確保のためムギ類（エンバク）や地域によってはデントコーンの播種を検討される事もあります。デントコーンを播種した場合、収穫後の牧草の播種は、翌年の春になります。デントコーンの極早生品種75日（LG3215）を利用し、晩秋の牧草播種が考えられますが、冬枯れのリスクが高いためお奨めできません。

一方、春にエンバクを播種することで、当年の飼料不足分を確保し、8月下旬に牧草播種を行う方法があります。

エンバクの播種は、5月連休前後までに行い、収穫は播種後およそ50日後になります。その頃のエンバクは出穂期から乳熟期になっていますので、この時期が刈取り適期となります。刈り遅れて枯れ上がると、嗜好性が低下しますので注意が必要です。また、エンバクは水分が高いため、サイレージにすると見かけ以上に水分が高くなっていることがあります。刈取り後の予乾はしっかりと行う必要があります。

収穫後は、牧草播種の準備に入ります。8月下旬の播種時期まで一か月程度の期間があります。異常気象の昨今ですが、慌てずに8月下旬から9月上旬の播種を心掛けて頂きたいと思います。

5. 最後に

為替相場が円安に転じたのは、昨年11月中旬以降でした。穀類を輸入に依存している日本の畜産現場では、為替レートに左右され行き場のない状況となっている現在、酪農分野では、自ら飼料生産を行うことができます。基本は、牛が喜んで食べることの出来る良質な自給飼料の増産を進めていくことであると改めて感じています。

（業務グループ 龍前）